

山口学芸大学 入学試験(令和八年度 一般 2期)

国 語 (時間 七〇分) その一

一次の文章は、作文教育について述べた文章である。これを読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、本文を一部改めたところがある。)

自分が受けてきた教育を思い返す時、どんな作文教育を受けたかすら思い出せない人は実際に多いだろう。しかし作文教育には、隠れているがゆえに重要な三つの教育的機能がある。

第一に、作文を書くことを通して私たちの認知と思考の型が形づくられていく。私たちは日々の経験の中で、あらゆる情報をすべて受け取っているわけではなく、無意識のうちに重要な情報とそうでない情報を⑦シユシヤ選択しながら生活している。作文の型を学ぶことは、そうした情報をいかに「編集」し、「構成」するか、その型を身につけることでもある。学校で習う作文の型に沿って、私たちは情報を選び、それらをつなげて結論へと導く。その過程で「論理」の道筋を習得しているのである。このような論理の型は、私たちが世界をどのように見て、どのような視点から理解するのかといった世界観の形成にも深く関わっている。

A 同じ四コマの絵を見て説明する作文実験を日本とアメリカの小学校で行ったところ、感想文を書き慣れた日本の子どもは、状況を細かく描写しながら、物事が起こった順番に「時系列」で述べた。それに対して、※5パラグラフエッセイで書いているアメリカの子どもは、結論を先に述べて、その結論の原因として出来事を述べる「因果律」を説明の枠組みとして用いた。同じ実験を日米の大学生に行うと、この傾向は大学生でも①同様に見られた。「説明する」という日常で行われる認知の基本型の形成に、作文教育は大きな影響を及ぼすのである。

B 同じ絵を使って結果の理由を求めると、日本の子どもは四コマすべての出来事を最初から順番に述べて、説明も理由づけも「時系列」の枠組みで述べた。それに対してアメリカの子どもは、結果に最も強く影響を与えた出来事のみを述べて他を省略した。日本の子どもは「※縁起説」、C すべてのものはそれぞれ他に依存し、他との関係においてのみ仮に現れているだけなので、人間にできることは、あらゆるものの関係性を意識しながら出来事が起こった順番をたどるのみという立場をとる。それに対してアメリカの子どもは、「優越因果説」、すなわちある現象や事象を説明するのに、特定の要因が他の要因よりも強い影響を及ぼすという立場を取るのも、結果を引き起こした最も強い原因を特定しようとする。それぞれの国の子どもは縁起説や優越因果説という言葉は知らなくとも、②作文の型に現れる当該社会の叙述の型から理由づけの枠組みも得るのである。

第二に、作文教育を通して、私たちはその社会における規範や価値観を学んでいる。作文における考え方の道筋や表現の仕方を習得することで、その社会で受け入れられやすい結論の形や、結論を導くために重要とされる情報の選び方、さらには他者の視点をどの程度取り入れるべきかを、子どもたちは身につけていく。また適切な感情表現は対立を避ける手段となるが、国や文化によつては、強く自己主張することが自立を示すものとされる。③こうした作文の学びは、集団の中で尊敬され、受け入れられる人物像を教えることにもつながっている。

たとえば先の日米の作文実験では、日本の子どもたちは、主人公になりきって独白し、自らの行動を反省して今後の心構えを語ったり、出来事を実況中継したりして④リンジョウ感あふれる表現をした。また全ての出来事を述べた後に教訓を付け加えて「教訓のお話」として⑤シめくくる例も複数見られた。こうした日本の作文には、経験から学び、素直に反省して教訓を得ようとする、日本の感想文に特有の規範的態度が現れている。

それに対して、アメリカの子どもたちは、「この日は主人公にとってこういう一日だった」と自分の意見を述べ、出来事の間に因果関係を見出して、一つ一つ解釈して説明するコメントを書いた。彼らは、出来事から教訓を引き出すことよりも、「なぜそれが起こったのか」を解釈して説明することが重要だと考えている。アメリカの子どもたちにとっては、自分の主張を述べ、それを因果関係で説明することが一つの規範になっているのである。

D 実験を行った時、日本の子どもは「けんた君(絵の主人公)の気持ちになって書けばいいの?」という質問をしたのに対して、アメリカでは「物語で書けばいいの、それともエッセイ?」という書く型に関する質問をした。フランスでも小学生を対象に同じ実験を行ったが、主人公の気持ちになって書けばよいのかと質問したのは日本だけだった。何に注目し、何をどこまで、どのような枠組みで情報を捉えるのかという認知と規範の違いが、作文の型とそれを教える教育によって育まれているのである。第三に、こうした作文法を通して形成される思考の型と適切な表現法は、能力評価にも大きな影響を及ぼしている。たとえば、理由づけを求められた時に出来事を時系列で述べる日本の子どもに対して、アメリカ人教師は「因果を理解できない」「そもそも質問の意味を理解していない」とアメリカ在住の日本人児童に低い評価を下すのである。それぞれの国で適切だとされている書き方に沿って書かないと良い評価が得られない。いくら知識や技術があっても、それらを評価可能な型に入れて表現しないと能力として認識されないのである。その意味で、作文の型は知識、思考法、技術をその国で認められた「能力」へ変換する装置の役割を果たす。

【中略】

このように、作文は個人の認知（ミクロレベル）から社会規範や道徳（マクロレベル）、能力の発揮の方法（制度・メゾレベル）まで、社会で生きていくための実に幅広く深い知識と技術を教えている。実際に四つの教育原理を体现している国で最もよく書かれ、また能力の評価にも使用されている作文を見ると、四領域の教育の目的と能力観が具体的に現れているのがよく分かる。表2・1（略）に四つの教育原理の作文の特徴をまとめた。

経済原理を体现するアメリカのエッセイは、説得と論証を目的にし、書き手の主張とその根拠のみを述べる。自己の主張の正しさの証明という、目的達成に必要なとされるステップの短さに経済効率性が現れる。ここで「主張」の道徳的な正しさは問われず、⁽⁴⁾実証的証拠によって力強く他人を説得して個人の目的を達成できるかが重視される。自分の考えと目的を持ち、人を動かし環境をも⁽⁵⁾巧みに操作して目的を達成する「真正の自己」―個性に基づく本当の自己―の確立が作文教育で目指されている。科学の「仮設検証」をモデルとし、科学的なデータや個人の体験、歴史的な事例、すなわち人間の五感で認識できる経験を根拠とする（実証主義）。経済が支配的な文化となった近・現代社会において、エッセイは「世界標準」の書き方となり、また「論理的な書き方」の普遍的な形だと受けとめられている。

それに対して政治原理を体现するフランス式小論文のディセルタシオンは、〈正―反―合〉の⁽⁶⁾弁証法を基本構造とする。主題に對する「一般的な見方」とそれに「反する見方」、それら二つを「総合する見方」を提示して、視点間の矛盾を解決することが作文の目的である。ディセルタシオンにおいては、個人の意見や体験は全く意味を持たない。古今の著名な思想や文学のテキストの厳密な引用のみがそれぞれの見方の根拠となる。引用により過去の偉人たちを對話させることによって、社会の様々な立場の人々の意見をじっくりと吟味し、公共の福祉に寄与できる市民を育てることが政治原理の教育の目的である。政治原理の作文のモデルは哲学の対話法である。自己の意見から距離を取り、他者の意見も全力で論証し、そこから新たな解決法を導ける「※修辞学的な自己」を育てることが作文教育で目指されている。

法技術原理を体现するイランのエンシャーと呼ばれる作文では、序論で比喻によって主題を表現し、本論では比喻に関連づけて主題の内容を説明する。結論で作文のメッセージを的確に表現する「⁽⁷⁾諺」、「詩や聖典の一節」「神への感謝」のいずれかを結びの言葉とする。宗教の教義も自然法も法律も、確固たる真理、あるいは所与の前提とされているため、それを個人が批判的に検討したり、別のあり方を模索したりすることは想定されていない。それゆえに学校で教える作文は、論証ではなく「文学的断片」という形を取り、主題を比喻的に扱う。簡潔性や明晰性⁽⁸⁾よりも、比喻を⁽⁹⁾クシした格調高く美しい文章表現に価値が置かれる。比喻を解釈していけば、教訓が見つかるはずだからである。どのような主題を扱っても最後には諺や著名な詩の一節、神への感謝と称賛で結論づけることによって、この世の真理と神が示した真理へと到達する作文の型が示されている。作文のモデルは※教訓譚^{たん}や逸話である。教科書や権威ある書物の丸ごとの暗記が教育法の中心であり、独創性や新奇性は求められない。求められている人間像は真理を規範として保持する「⁽¹⁰⁾遵法者」としての自己である。

社会原理を体现する日本の感想文は、序論で書く対象の背景と書き手が対象に対して持っていた感想（理解・知識・考え・感情）を書き、本論で対象を通した書き手の体験を述べ、結論で体験後の感想を述べる。体験の前後での書き手の気持ちや考えの「変化」を感想という形で述べさせるのは、体験を通した自己の成長の軌跡を描かせ、その体験を今後どう自己の行為や生き方に生かすかを考えさせる目的があるからである。読書感想文はその典型である。感想そのものの質は「当事者性と切実性」を持って書けるかどうかによって決まる。つまり、自分の生活や生き方とどう関わるのかという視点を持つことが重要である。感想文で期待されているのは個人の体験・感情・生き方を社会の構成員である他者と共有しうる「共通感覚」として表現すること、つまり「間主観」―個々の主観が他者との相互の修正を経て、複数の主観の間の一致をみること―の表現として提示することにある。

社会原理では、普遍的で絶対的な倫理というよりは、共同体を成り立たせる親切や慈悲、譲り合いといった「※利他」の考えに基づく「善意」が間主観と道徳を形成する。こうして獲得された道徳観は社会生活のあらゆる場面で発揮され、社会秩序の維持に貢献する。「あなたはどうか感じるか、どう思うか」という「あなたの気持ち」を常に問われ、書き、他者と確認し合った体験が、他者になったつもりで感じ、他者の意を汲み取って、自らの身の振り方を考える思考法を形成する。それは共感を媒介にして行われる。目指されているのは、縁起的自己である。感想文のモデルは、日本で明治時代後期に生まれた※綴方^{つづかた}である。

（渡邊雅子『共感の論理―日本から始まる教育革命』）

（注）※5パラグラフエッセイⅡ序論、本論Ⅰ、本論Ⅱ、本論Ⅲ、結論の五段落で構成されたエッセイや小論文の基本形。

※縁起Ⅱ縁りて起こる。あらゆる事象は、他との関係が縁となって生起すること。

※修辞学的Ⅱ弁論や説得の技法や法則などを追求する学問分野である修辞学（レトリック）の考え方や技法にのっとっている様子。

※教訓譚Ⅱ道徳的な教えや教訓を伝える物語。 ※利他Ⅱ他人のため（幸福）を第一に考えること。

※綴方Ⅱ文章の作り方。作文。

問一 傍線部⑦⑧のカタカナを漢字に改め、漢字はその読み仮名を書きなさい。

問二 空欄

A

D

 の中に入る言葉として適切なものを次のア～カの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。
【ア また イ もし ウ つまり エ さらに オ すなわち カ たとえば】

問三 傍線部①「同様に見られた」とあるが、「同様に」の内容を、本文中の言葉を用いて、四十字以内で答えなさい。（句読点を含む。）

問四 傍線部②「作文の型に現れる当該社会の叙述の型から理由づけの枠組みも得る」について次の(a)・(b)に答えなさい。
(a) 「当該社会」とはどこを指しているか。
(b) 「作文の型に現れる当該社会の叙述の型」を、本文中の言葉を用いて答えなさい。

問五 傍線部③「こうした作文の学びは、集団の中で尊敬され、受け入れられる人物像を教えることにもつながっている。」とあるが、それはなぜか。本文中の言葉を用いて三十字程度で答えなさい。（句読点を含む。）

問六 傍線部④「実証的証拠」とはどういうものか。本文中から適当な部分を抜き出し、初めと終りの三文字ずつで答えなさい。

問七 傍線部⑤「巧」の漢字を含む熟語を、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。
ア 事業にセイコウする
イ セイコウな工芸品
ウ センコウ投資する
エ 書類センコウする
オ 独断センコウする

問八 傍線部⑥の「弁証法」について、次の(a)・(b)の問いに答えなさい。
(a) ここで述べている弁証法とはどのようなものか。本文中から六十字以内で抜き出し、初めと終りの三文字で答えなさい。
(b) 次のテーマについて、弁証法の考え方を用いて、自分の意見を百字程度で論理的に述べなさい。
【テーマ】「小学校におけるタブレット端末の使用は推進すべきか」

問九 次の表は、本文中で述べられた「作文教育における隠れた教育的機能」を整理した表である。表内の空欄ア～オに、本文中の言葉を抜き出し入れることによって、表を完成しなさい。

作文教育の隠れた教育的機能について (本文をもとに出題者作成)		
国 学び	アメリカ	日本
中心となる 作文の型	5パラグラフ エッセイ	ア
作文を書くことで 私たちが形成するもの	認知と思考の型	
	イ	
作文の目的	ウ	体験を通した自己の成長の軌跡を描かせ、その体験を今後どう自己の行為や生き方に生かすのかを考えさせる。
日米の教育原理	経済原理	社会原理
重視されること 期待される力	実証的証拠によって力強く他人を説得して個人の目的を達成できるか	エ
目指す人間像	真正の自己	オ

二次の文章は、昭和初期に書かれた谷崎潤一郎の随筆『陰翳礼讃』の一節である。これを読んで、後の問いに答えなさい。（設問の都合上、本文を一部改めたところがある。）

京都に「わらんじや」と云う有名な料理屋があつて、この家では近頃まで客間に電燈をとまず、古風な※燭台を使うのが名物になつていたが、ことしの春、久しぶりで行つてみると、いつの間にか※行燈式の電燈を使うようになってゐる。いつからこうしたのかと聞くと、去年からこれにいたしました。蠟燭の灯ではあまり暗すぎると仰っしゃるお客様が多いものでござりますから、⁽¹⁾抛んどころなく云う風に致しましたが、やはり昔のままの方がよいと仰っしゃるお方には、燭台を持つて参りますと云う。で、折角それを楽しみにして来たのであるから、燭台に替えて貰つたが、その時私が感じたのは、日本の⁽²⁾漆器の美しさは、そう云うぼんやりした薄明りの中に置いてこそ、始めてほんとうに發揮されると云うことであつた。「わらんじや」の座敷と云うのは四畳半ぐらいの小じんまりした茶席であつて、床柱や天井なども黒光りに光つてゐるから、行燈式の電燈でも勿論暗い感じがする。が、それを一層暗い燭台に改めて、その穂のゆらゆらとまたたく蔭にある膳や椀を視詰めてゐると、それらの塗り物の沼のような深さと厚みとを持つたつやが、⁽²⁾全く今までとは違つた魅力を帯び出して来るのを発見する。そしてわれわれの祖先がうるしと云う塗料を見出し、それを塗つた器物の色沢に愛着を覚えたことの⁽¹⁾グウゼンでないのを知るのである。友人サバルワル君の話に、印度では現在でも食器に陶器を使うことを卑しき、多くは塗り物を用ゐると云う。われわれはその反対に、茶事とか、儀式とかの場合でなければ、膳と吸い物椀の外は殆ど陶器ばかりを用ゐ、漆器と云うと、野暮くさい、※雅味の無いものにされてしまつてゐるが、それは一つには、採光や照明の設備がもたらした「A」のせいではないであらうか。事実、「B」を条件に入れないければ漆器の美しさは考えられないと云つていい。今日では白漆と云うようなものも出来たけれども、昔からある漆器の肌は、黒か、茶か、赤であつて、それは幾重もの「闇」が⁽³⁾堆積した色であり、周囲を包む暗黒の中から必然的に生れ出たもののように思える。派手な蒔絵などを⁽⁴⁾施したピカピカ光る蠟塗りの手箱とか、※文台とか、棚とかを見ると、いかにもケバケバしくて落ち着きがなく、俗悪にさえ思えることがあるけれども、もしそれらの器物を取り囲む空白を真つ黒な闇で塗り潰し、太陽や電燈の光線に代えるに一点の※燈明か蠟燭のあかりにして見給え、忽ちそのケバケバしいものが底深く沈んで、渋い、重々しいものになるであらう。古えの工芸家がそれらの器に漆を塗り、蒔絵を画く時は、必ずそう云う暗い部屋を頭に置き、乏しい光りの中における効果を狙つたのに違ひなく、金色を贅沢に使つたりしたのも、それが闇に浮かび出る工合や、燈火を反射する加減を考慮したものと察せられる。つまり金蒔絵は明るい所で一度にぱつとその全体を見るものではなく、暗い所でいろいろの部分ときどき少しずつ底光りするのを見るように出来てゐるのであつて、⁽⁵⁾ゴウカ絢爛な模様の大半を闇に隠してしまつてゐるのが、云い知れぬ余情を催すのである。そして、あのピカピカ光る肌のつやも、暗い所に置いてみると、それがともし火の穂のゆらめきを映し、静かな部屋にもおりおり「C」のおとずれのあることを教えて、そぞろに人を瞑想に誘ひ込む。もしあの陰鬱な室内に漆器と云うものがなかつたなら、蠟燭や燈明の醸し出す怪しい光りの夢の世界が、その灯のはためきが打つてゐる夜の脈搏が、どんなに魅力が※滅殺されることであらう。まことにそれは、⁽⁴⁾畳の上に幾すじもの小川が流れ、池水が湛えられてゐる如く、一つの灯影を此処彼処に捉えて、細く、※かそけく、⁽⁵⁾ちらちらと伝えながら、夜そのものに蒔絵をしたような※綾を織り出す。※けだし食器としては陶器も悪くないけれども、陶器には漆器のような陰翳がなく、深みがない。陶器は手に触れると重く冷たく、しかも熱を伝えることが早いので熱い物を盛るのに不便であり、その上カチカチと云う音がするが、漆器は手ざわりが軽く、柔かで、耳につく程の音を立てない。私は、吸い物椀を手につつた時の、掌が受ける汁の重みの感覚と、生あたたかい温味とを何よりも好む。それは生れたての赤ん坊のぷよぷよした肉体を支えたような感じでもある。吸い物椀に今も塗り物が用ゐられるのは全く理由のあることであつて、陶器の容れ物ではあは行かない。第一、蓋を取つた時に、陶器では中にある汁の身や色合が皆見えてしまう。漆器の椀のいいことは、まずその蓋を取つて、口に持つて行くまでの間、暗い奥深い底の方に、容器の色と殆ど違わない液体が音もなく澱んでゐるのを眺めた瞬間の気持である。人は、その椀の中の闇に何があるかを見分けることは出来ないが、汁がゆるやかに動揺するのを手の上に感じ、椀の縁がほんのり汗を掻いてゐるので、そこから湯気が立ち昇りつつあることを知り、その湯気が運ぶ匂に依つて口に啣む前にぼんやり味わいを予覚する。その瞬間の心持、スープを浅い白ちやけた皿に入れて出す西洋流に比べて何と云う相違か。それは一種の神秘であり、樺味であるとも云えなくはない。

（注）※燭台Ⅱ持ち運びのできる装飾的なろうそく立て。

※行燈Ⅱ火皿を、木製の枠に和紙を張つた風よけで覆つた日本の伝統的な室内照明器具。現在は電気式が多い。

※雅味Ⅱ上品な味わい。

※燈明Ⅱ神仏に供える灯火。

※かそけくⅡ「印象がかすかだ」の雅語的表現。

※けだしⅡ確かに。思うに。

※文台Ⅱ書物や短冊を乗せるための、低い小さな机。

※滅殺Ⅱ減らして少なくすること。

※綾Ⅱ斜めに交差してできる鮮やかな模様（の絹織物）。

問一 傍線部⑦・⑧のカタカナを漢字に改め、漢字はその読み仮名を書きなさい。

問二 傍線部(1)「掘よんどころなく」の意味として最も適当なものを選んで、記号で答えなさい。

【ア ゆっくりと イ ただちに ウ やむをえず エ わざと オ なんとなく】

問三 傍線部(2)「全く今までは違った魅力を帯び出して来るのを発見する」とあるが、何と、何とを比べて「違った魅力を帯び出して来る」と言っているのか。次の空欄【(a)】【(b)】に文中から適当な言葉を入れて、答えなさい。

【(a)】と 【(b)】とを比べてみると、全く今までは違った魅力を帯び出して来るのを発見する。

問四 空欄【A】【B】について。次の(a)・(b)に答えなさい。

(a) 【A】に入る言葉を、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

【ア 派手さ イ 明るさ ウ 暗さ エ 深み オ 怪しさ】

(b) 【B】に入る言葉を、本文中から、漢字一字で抜き出しなさい。

問五 傍線部(3)「堆積」の「積」と違ちがう意味を含む言葉を、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

【ア 積年 イ 面積 ウ 積雪 エ 山積 オ 累積】

問六 傍線部(4)「豊の上に幾すじもの小川が流れ、池水が湛たえられている如ごとく」と、傍線部(5)「ちらちらと」の表現技法について、次の(a)・(b)に答えなさい。

(a) それぞれ、どのような表現技法を用いているか。次のア～キの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

【ア 擬人法 イ 擬態語 ウ 擬声語 エ 反復法 オ 直喩 カ 隠喩 キ 諷喩】

(b) 傍線部(5)と同じ技法を用いている言葉を、本文中から一か所抜き出しなさい。

問七 この文章では、漆器の腕の魅力をどのように説明しているか。「五感」という言葉を使って百字程度で説明しなさい。

問八 この文章で筆者が述べようとしていることとして適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 日本の伝統的な美は陰鬱な室内ではその魅力の大半が隠されてしまい、太陽の光のもとでこそよく味わえる。
- イ 日本の伝統的な美は陰翳の中でこそ深みや趣が生み出されるが、生活の変化によりその魅力が失われつつある。
- ウ 日本の伝統的な美は明るさを追求する西洋文化の恩恵を受けることで、その美の感受が洗練されつつある。
- エ 漆器は西洋的な明るい空間に置かれると、日本の伝統的な空間における美とは異なる魅力を帯び出して来る。
- オ 漆器は実際は大変実用的な食器であり、日本の日常生活では、西洋の陶器ではなく漆器を用いるべきである。

三 次の古文は、『土佐日記』（紀貫之）の一節で、作品の末尾近くの箇所である。これを読んで、後の問いに答えなさい。（設問の都合により本文を一部改めた部分がある。）

※ 住吉のわたりを漕こぎ行く。ある人のよめる歌、

今見てぞ ※ 身をば知りぬる住江すみのえの松より先にわれは経へにけり

ここに、※ 昔へ人の母、一日ひとひ片時も忘れ a ねばよめる、

住江に船さし寄よせよ忘草わすれぐさしるしありやと摘つみて行くべく

となむ。※ うつたへに忘れなむとはあらで、恋しき心地、しばしやすめて、またも恋ふる力にせむ、となるべし。

かくいひて、※ ながめつつ来るあひだに、 1 ゆくりなく風吹きて、漕こげども漕こげども、後しりへ退しぞきに退きて、※ ほとほとしくう

ちはめ b つべし。楫取かとりのいはく、この住吉の明神は、※ 例の神ぞかし。ほしき物ぞおはすらむとは、いまめくものか。さて、「幣ぬさを 2 奉り給へ」といふ。いふに従ひて、幣奉る。かく奉れども、 3 もはら風やまで、いや吹きに、いや立ちに、風波のあやふ

ければ、楫取、またはいく、「幣には⁴御心のいかねば御船も行かぬなり。なほ、うれしと思ひ給^たべきもの奉り給^たべ」といふ。また、いふに従ひて、「いかがはせむ」とて、「眼^{まなこ}もこそ二つあれ、ただ一つある鏡を奉る」とて、海にうちはめつれば、口惜し。されば、⁵うちつけに、海は鏡の面のごとなりぬれば、ある人のよめる歌、

【 6 】 神の心を荒るる海に鏡を入れてかつ見つるかな

いたく、※「住江」「忘草」「岸の姫松」などいふ神にはあらずかし。目もうつらうつら、鏡に神の心をこそは見つれ。⁷楫取の心は、神の御心なりけり。

(注)※住吉のわたりⅡ住吉神社のあたり。今の大阪府住吉区、目的地の京まで百kmほどの場所。

※身Ⅱ我が身の年齢。

※昔へ人Ⅱ土佐を出立前に亡くした幼い女兒。

※うつたへにⅡ必ずしも。

※ながめつつⅡ亡児をしのび思い出にふけりながら。

※ほとほとしくⅡ危うく。

※例の神Ⅱ気の荒い神。

※「住江」「忘草」「岸の姫松」などいふ神Ⅱ風流を解する優雅な神々。

問一 本文中には、もともと「¹」が付けられていた箇所がある。それはどこか。初めと終りの三文字を書き抜いて答えなさい。
(句読点は字数に含む。)

問二 二重傍線部 a・b について、次の a「ね」の例にならって、b「つ」を文法的に説明しなさい。

(例) a…助動詞「ず」の已然形で意味は打消。

問三 傍線部 1「ゆくりなく」、5「うちつけに」の意味を、それぞれ次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- | | | | |
|------------|--------|-------|---------|
| 1 アせわしく | イ前ぶれなく | ウ突然に | エ不注意に |
| 5 ア頼もしいことに | イ無遠慮に | ウとたんに | エちよつと見て |

問四 傍線部 2「奉り給へ」について述べた次の説明文の、空欄 A～C に当てはまる適語を、本文中から書き抜きなさい。

「奉り」は、(A) から (B) への敬意を表し、「給へ」は、(A) から (C) への敬意を表している。

問五 傍線部 3 を、現代語訳しなさい。

問六 傍線部 4 の「御心」とは、誰のことか。文中の言葉を使って答えなさい。

問七 【 6 】に入る適当な語を、次から選び、記号で答えなさい。

- | | | | |
|---------|---------|---------|---------|
| ア あらたまの | イ くさまくら | ウ ぬばたまの | エ ちはやぶる |
|---------|---------|---------|---------|

問八 傍線部 7 は、どのような気持ちを述べたものか。その説明として最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- | |
|-------------------------------------|
| ア 船頭は住吉の神の意向をよく承知しているのだなあ、という気持ち。 |
| イ 船頭は住吉の神の言うままに行動しているのだろう、という気持ち。 |
| ウ 船頭の役割は住吉の神の託宣を体現することだったのか、という気持ち。 |
| エ 船頭の指示は住吉の神と同じで言うことを聞くしかない、という気持ち。 |